

# 勝林寺寺報

## 旦那さま

「わたしの大事な旦那さま」とは一時流行の歌謡曲の一節であった。自分の夫をまともに指すにはちょっと照れ臭くて、「うちの旦那はねエ」などとよぶのであるが、サテその語源についてあまり知られていない。

実はこのことば、古代インドのサンスクリットという言葉。そしてそのことばを通して日本に紀元七世紀ごろ伝わってきた仏教にと、て基本的な大切な言葉である。「ダーナ」という。意味は「布施」(施す)。

いわゆる「六度」(六パラミツタ)の第一番目の実践徳目。日本の江戸時代に出来た歌舞伎「勧進帳」には弁慶が、奈良東大寺の有力な寄付者を「大旦那」と呼んでいる。

さて、「六度」というのは「此岸」(シガン)こちらの人間世界・迷いの世界から、彼の悟りの世界「彼岸」に渡るための大事な実践項目。1布施(ほどこし) 2持戒(個人)的集団的規律を守る) 3忍辱(にんじやく)困難を耐え忍ぶ) 4精進(しやうじん)たゆまず努力する) 5禅定(ぜんじやう)精神統一) 6智慧(ち)真実を見抜く知力)いわゆる「般若波羅密」(はんにゃはらみつ)。天台宗や禅宗などで読む『般若心経』などに説かれているもの。

その第一番目の「布施」には「財施」(経済支援)と「無財施」(金銭支援でない布施)と「法施」(まことのみのりを説き聞かせる)など。また、ほかに「無畏施」(むいせ)と「無怖心」(むふしん)を与えないのも大事な布施だと云う。

次に「無財の七施」といって、お金を持たなくても出来る布施がある。

- 1 言辭施(ごんじ) (やさしいことばの施し)
- 2 眼施(がんじ) (やさしいまなざし)
- 3 和言施(わごんじ) (和言愛語施) (おだやかな言やわらかな声かけ)
- 4 心施(しんじ) (やさしい思いやり)
- 5 身施(しんじ) (体を動かしてする奉仕活動)

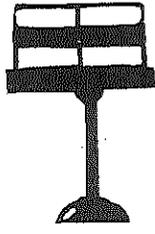
6 牀座施(じやうざじ) あたたかな座席を設ける。  
7 房舎施(ぼうしゃじ) 心安らぐ住まいを考える。

なにかんなく、これからの社会は福祉社会でなくてはならない。国際的にも、政治・経済・文化いずれの場面でも互いに支え合い助けあわなくては立ち行くものではない。独りよがり・孤立・独走はむしろ破滅に通じる。老人・就労者・若者、青少年も誰も被災者も出来得るかぎり積極的に支えあわなければ未来は開いて来ない。仏教では貪欲(ごんよく)自分の利益だけを貪る。瞋恚(しん)憎み闘争を仕掛ける。愚痴(ご)真実が見えない。慢心(まん)疑(ぎ)などを煩惱と指摘し、なにかんなく根本煩惱といって「無明」(むみやう)と

「渴愛」(かつあい)とをあげる。「無明」とは真実が見えない。「渴愛」とは、自己中心にしかものを見ないこと。己をよしとし、他を見下げ差別する心。この場合、最も警戒しなければならぬポイントは「独善」(どくぜん)「慢心」に堕ちること。人を見下げて「俺だけが正しい」「俺がしてやっているのだ」という傲慢な姿勢がいちばん恐ろしい。戦争のもとだと云う。

蓮如という真宗第八代門主が云った。「ほとけさまの教えのうえには「してあげる」という心があつてはならない。これをしてやると、人のこころに迎合(き)に入られよう」とするその傲慢なところがつまずきなのだ。「なぜ?」

「してやっている」↓「してあげてる」↓「という逆恨みが潜伏しているではないか。蓮如は云う。「仏法を聞いたものならば、なにごとくも報謝とぞんずべきなり」(ボランテイアでもなんでも、わたしがさせていたでているのだと思ふのが当然だ)もう年がよったなら何をしても失敗だけかえって人様に迷惑かけるばかり。それでもお許しいただいてささせていただきましょう。



### 第四十六回出石組念仏奉仕団のお誘い

平成二十五年五月九日・一〇日の二日間出石組念仏奉仕団が実施されます。奉仕作業を行うことは勿論ですが、出石組の他の寺院の御同行と親交を深めたり、お聴聞の機会を得たり、御晨朝に参加したり・奉仕団ならではのありがたい出逢いがあります。ぜひ、ご参加ください。

参加費 お一人二万円(一泊四食)

記念写真代八〇〇円

\*参加人数によつては、終了後、返金がある場合があります。

申し込み方法

勝林寺までご連絡ください

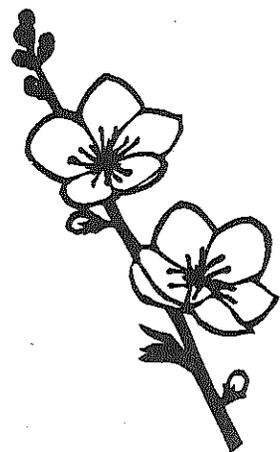
申込締切

三月二〇日(水)

\*準備の都合上、早目の締切となっております。

その他

勝林寺からは、組長として住職とお世話係として坊守が参加させていただきます。



### 葬儀

一月三十日

上小田 齋藤節夫様 七十五歳

### 三月 勝林寺 予定

二日(土)	澤田貞彦宅 七回忌
四日(月)	兵庫教区 実践運動常任委員会
六日(水)	勝林寺遠忌法要 勤式会議
八日(金)	勝林寺遠忌法要 業者打合わせ
九日(土)	山田弘之宅 三回忌
十日(日)	岸下きよみ宅 三回忌
十日(日)	出石組連研 補修講義
十三日(水)	田村忠治宅 五〇回忌
十六日(土)	齋藤明宏宅 忌明法要
一七日(日)	数森美咲子宅 一周忌
二〇日(水)	勝林寺仏婦繪会
二〇日(水)	東日本大震災三回忌法要
二〇日(水)	春彼岸・合同役員会
二一日(木)	信楽峻鷹先生 米寿記念講演会
二二日(金)	角折宅 忌明法要
二三日(土)	岸下正美宅 一七回忌
二三日(日)	出石組 組内会
二四日(日)	藤本 勉宅 三回忌
二六日(火)	関川 永宅 三回忌
二六日(火)	みのりを聞く会
二七日(水)	兵庫教区 組長会
三〇日(土)	田中嘉信宅 一三回忌
三一日(日)	足立幸夫宅 一周忌



# 昔のこと

こどもの頃を思い出してみると、随分移りかわってしまっていることがある。

第一に、そのころ「こどもことば」であったものを、今は大人の日常使うようになっている。

「しんちゃん」言葉。「食べてみんちゃん」「してみんちゃん」「なげてみんちゃん」「うけてみんちゃん」など。この「ちゃん」ことばはもと幼児語で。おとなはちゃんと「てみなさい」と云っていた。それが昭和の初期、幼稚園や低学年の女教師たちが（そのころ袴なんか着けいられていた）児童生徒によりその形の教育理念から意識してこんな幼児語を使われ始めた。これが家庭の子育てのなかにも広がり、おとなの男子社会をも席卷していった。「してみい」「云うてみい」などの卑しい男子ことばは駆逐されていった。

あいさつのことばも変わってしまった。子供が、お店に買い物に行く時、戸口で「へー」と声をかける。すると駄菓子やおばあさんが「へえ、なんですエ」と暖簾のおこうから顔を出して。「なにを買いにきとくれたんや」。

お菓子類にも、今の時代にはなくなっているものが多い。あつた。

店先の桶に「黒砂糖」がはいっていて、ノミのようなものでそれを欠いて新聞紙に包んでくれた。キャラメルは「ぼななキャラメル」「コンブ飴」「新高キャラメル」。それに干しぶどうもキャラメルの箱に入ったのもあった。ガラスの薄いビンにはいった色さまざま。ナニッキをよく買った。5厘銭もあった。まだ一文銭を糸に通して使っていたように思う。

## 今月の掲示

自分の弱さを、心から知り得たとき、人は真から強くなる。

北原 白秋

# お彼岸さん

「彼岸」とは、古いインドのこぼでニルバーナ（到彼岸）（彼の岸に到る）。彼の岸、こちらの岸から向こう側の岸へ渡ることに譬えて、こちらの岸（此岸）（迷いの世界）を離れて、（向こうの悟りの岸（彼岸））へ迎いつく。それがお釈迦さまの教えだよと示しているのです。

春と秋とに（春彼岸・秋彼岸）一週間ずつ彼岸会としておつとめする習慣は、仏教が日本に渡ってきてすぐに聖徳太子のころから始められたそうです。丁度それは暦の上で春分秋分に当たります。そこで、日本人達は、真西に沈みゆく夕日の向こうに悟りの世界を、民族感覚として想定しました。そして亡くなつた父や母はあのお浄土からいつも私を念じていて下さる、そんな世界があるんだと「お浄土」「悟りの世界」を重ねあわせて想うようになったのでしよう。一種の民族文化です。

## 似ている漢字

巳（ミ）は上に、己（ヘ）はステニ・ヤム。ノミ）中ほどに、己（オノレ・ツチノト）下につく。

爪と瓜。ウリにツメあり。ツメにツメなし。

戌（いぬ）に棒あり、戊（つちのえ）に棒なし。

ウシ（牛）にツノあり。ウマ（馬）にツノなし。

櫻（さくら）。二階の女が気（木）にかか

る。壽。侍（さむらい）の笛（フエ）は一インチ。

# 彼岸会の「案内

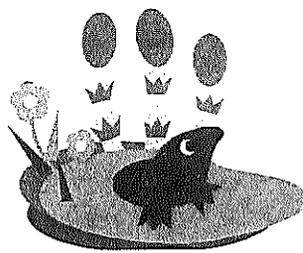
この寒さも、あと二十日もすれば少しずつ和らぎ、田んぼの畔には、ふきのとうや土筆が顔を見せることでしょう。そんな景色を見ながら、皆さんでお参りください。

日時 平成二十五年三月二十日（水）

午後二時より

\*午前中は、仏婦総会があります。

続けてお参りください。



## 勝林寺の本堂に

「ウタの声」が聞こえる

三月二十日（水）

仏教婦人会総会に

ご参加ください

開会 九時三〇分

総会行事、追悼法要、記念法話の後、アトラクションをみんなど楽しみましょう。住職とお友達でつくるバンドの皆さんが本堂に「ウタの声」を響かせてください。

# どすん

長らく「仏婦の総会」は、永代経の二日目と親しまれてきました。今年から彼岸会の開催日が変わります。今年から彼岸会の勤まる春分の日の午前に開催いたします。第一回目の

今年は、三月二十日です。休日の開催でもあり、日頃お仕事で忙しくされている方にも、本堂に「どすん」と座っていただきたいです。

思いがけず、寺のことなど何もわからない私が「坊守さん」と呼んでいただくようになり、早や二〇年が経ちました。その間、私が非力な分を、仏婦役員さんをはじめ会員の皆様が支えてくださいました。おかげで、寺の運営も仏婦活動も二十年前と大きく変わることもなく続けることができました。私が、教員の職を辞した四年前からは、寺の行事の準備や反省に時間をかけられるようになりました。ご門徒の皆さんとゆっくりお話しできるようなにもなりました。聴聞させていただく時間が増えました。お勉強させていただく機会も増えました。そしたら、私の中に「こんなふうにしてみてはどうだろう」という思いが、自然におこつてきました。それでも、何かを変えたいという思いは、とても勇気のいることでした。しかし、このたび、役員の方々がそつと背中を押してくださいました。そして、総会の期日変更という一歩を踏み出すことができました。この一歩が「一人でも多くの方に、仏縁に遇っていただきたい、いのちの尊さにめざめていただきたい」という願いを叶える一歩になればいいと考えています。

二十年経って、ようやく自分で考えて踏み出した一歩です。二歩目もぼちぼちいきますね。

（文責 坊守）